

様 式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

## 科学研究費助成事業

## 研究成果報告書



平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：12102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26770133

研究課題名(和文) 英語疑似空所化の史的発達についての生成統語論的研究

研究課題名(英文) A Generative Syntactic Approach to the Historical Development of Pseudogapping in English

研究代表者

山村 崇斗(YAMAMURA, Shuto)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号：30706940

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000 円

研究成果の概要(和文)：疑似空所化や動詞句省略の古英語から現代英語に至るまで分布を電子コーパスを利用して調査し、それらが歴史を通じて現代でいう「助動詞」の後ろでのみ観察されることが確認された。また英語の動詞句省略・疑似空所化の認可には助動詞のような機能項目が必要だとする理論から、従来の「一部の動詞が助動詞へと歴史の中で変化した」という仮説は実際には当てはまらず、古英語期から助動詞が確立していたことが分かった。

研究成果の概要(英文)：I examined the distribution of pseudogapping and VP-ellipsis in the history of English, i.e. from Old English to Present-day English, based on electronic corpora. The result shows that these elliptical constructions occur after pre-modals in Old English and Middle English. It is pointed out that the general assumption that pre-modals are not auxiliaries but lexical verbs is not compatible with the theoretical assumption that auxiliaries are responsible for the licensing of pseudogapping and VPE. This leads us to conclude that the pre-modals were already established as auxiliaries. Furthermore, this conclusion amounts to claim that English modals did not undergo the grammaticalization from lexical verbs to auxiliary verbs, whereas it has been widely assumed.

研究分野：言語学、英語学

キーワード：疑似空所化 動詞句省略 PF削除分析 英語の(前)法助動詞 生成文法理論 形態統語論 英語史 名詞用法形容詞

### 1. 研究開始当初の背景

動詞句省略の史的研究に関しては、自身の先行研究がある。そこでは、史的電子コーパスを用いて収集した古英語・中英語の言語データを観察し、生成文法理論に基づいた理論的説明が試みられている。そこで特に注目されたのは、法助動詞の前身である前法助動詞の語彙特性と動詞句省略の統語派生だった。従来、古英語・中英語の前法助動詞は本動詞としてみなされ、16世紀までに助動詞へと文法化したと考えられてきた。加えて、古英語・中英語では現代英語とは異なり動詞が基底生成位置からTやC位置へと繰り上がる。Doron (1990)、Goldberg (2005)が、動詞繰り上げのあるヘブライ語で本動詞を残余とする動詞句省略を報告していることから、古英語・中英語でも同じ現象がみられると予測される。しかし、実際には前法助動詞の後位でのみ動詞句省略が観察されており、その他の本動詞とは異なる振る舞いをしていることは報告されてきた。

一方で、動詞句省略の変種だと考えられている疑似空所化の史的研究は、当該構文の初期研究(Levin 1980)以来それほど充実しているとはいえなかった。Levin (1980)は、疑似空所化の起源は本動詞 *do* が直接目的語をとる構造であり、本動詞 *do* が助動詞へと変化したことで、その他の助動詞へと伝播したと主張している。まず、この主張が実際の史的言語データによって支持されるかの検証が必要だと思われ、また調査によって得られた言語データに適切な理論的説明を見出すことが必要だと考えたことが、本研究に取り掛かる動機だった。

### 2. 研究の目的

疑似空所化を網羅的に調査し、その本質の解明を進める。動詞句省略と非常によく似た疑似空所化であるが、現代英語にみられる比較構文で頻繁に生じるという特異性が、古英語ではみられないという事実から、疑似空所化の本質的説明のために、英語の史的発達を考慮に入れ、英語史における疑似空所化の分布を明らかにする調査研究を行う。

文献調査によって得られたデータを生成文法理論に基づいて分析し、言語事実の背後にある文法の本質に迫ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

各時代の疑似空所化の調査のため、主に史的電子コーパス The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose(古英語)、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, 2nd edition(中英語)、The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English(初期近代英語)、The Penn Parsed Corpus of Modern British English(後期近代英語)を用いる。現代英語に関しても電子コーパスや英語母語話者へのインタビューに基づいてデータを収集する。

収集されたデータから疑似空所化の発達史を解明し、各発達段階の背後にある文法の実態の説明を、生成文法理論に基づいて試みる。

### 4. 研究成果

英語史における疑似空所化の分布に関する観察の不足を補うため、史的電子コーパスにおいて省略に付されたタグを手掛かりに行った疑似空所化を調査した結果、中英語、初期近代英語、後期近代英語における疑似空所化が以下のように分布していたことが分かった。カッコ内の数字は百万語当たりの調整頻度である。

中英語：17例 (14.71)

初期近代英語：26例 (14.96)

後期近代英語：3例 (3.16)

また、タグのみに依らず助動詞の周辺を調査した結果、古英語、中英語における疑似空所化が以下のように分布していたことが分かった。省略構文としてタグ付けされていない事例も、法助動詞が含まれ、不定詞を欠く事例全てを収集し分類したため、上記の調査結果と総数で不一致がみられる。

	古英語	中英語
主節：	0例	17例
等位節：	4例	0例
関係節：	11例	4例
比較節：	4例	5例
副詞節：	6例	10例
補部節：	0例	1例

Hoeksema (2006)が現代英語の疑似空所化に関して、比較構文に生じやすいと指摘しているが、古英語、中英語に関しては、比較構文に限らず様々な節タイプで生じていることが分かった。

なお、初期近代英語、後期近代英語に関しては、節タイプごとの分類を行わなかった。また、研究を進めていく中で、検証予定であった「疑似空所化は動詞句省略の亜種ではなく、それぞれ独立した省略構文である」という仮説は、廃棄とはいかないまでも、一時棚上げとする方針に至り、以降、差し当たり疑似空所化も動詞句省略も同じくPF削除を適用するという見地に立つことにした。このように方針が変わった理由としては、後述の通り、研究の焦点が疑似空所化だけでなく動詞句省略も含めた助動詞後位省略構文自体の認可に関わる特性に移ったことである。

本研究で提案した疑似空所化の統語派生のうち、残余要素の移動に関しては、以下のように分析される。自身の先行研究で指摘したように、語順が比較的自由であった古英語や中英語に関しては、Pintzuk and Taylor (2006)を援用し、基底語順がVO語順の文法とOV語順の文法が競合しており、目的語移動に関しては、目的語の種類ごとに多様なパターンがあると仮定した。

### 肯定目的語

基底 V0	表層 V0
基底 OV	表層 OV
基底 OV	表層 [tV]0 (右方移動)

### 量化目的語

基底 V0	表層 V0
基底 V0	表層 0[Vt] (左方移動)
基底 OV	表層 OV
基底 OV	表層 [tV]0 (右方移動)

### 否定目的語

基底 V0	表層 V0
基底 V0	表層 0[Vt] (左方移動)
基底 OV	表層 OV

このような移動の後に、削除が適用されることで疑似空所化が派生されるが、この多様な語順の派生方法のため、Hoeksema の観察が古英語や中英語には当てはまらな思考え、Chomsky (2013) の Labeling Algorithm を用いた極小主義統語論の観点から、内併合はラベルを持つもの同士で起こると規定した上で右方移動と左方移動の分析を試みた。この規定により、基底 V0 語順から目的語を左方移動した場合、2つの統語対象(S0)が生じる。

$$S0^1 = \{DP_{\text{SUBJ}}, vP^{[\text{Foc}]}\}$$

$$S0^2 = \{DP_{\text{OBJ}}^{[\text{Foc}]}, vP^{[\text{Foc}]}\}$$

S0<sup>1</sup>は主語DPが移動することでvPのラベルが付けられる。フェイズ主要部vと目的語にFocus素性を仮定し、素性共有によってS0<sup>2</sup>にはFocusPのラベルが付けられ、左不可として音声具現を得ると考えた。基底OVからの目的語の右方移動した場合も、2つの統語対象が作られるが、この場合はFocus素性を仮定していない。

$$S0^1 = \{DP_{\text{SUBJ}}, vP\}$$

$$S0^2 = \{DP_{\text{OBJ}}, vP\}$$

S0<sup>1</sup>のラベル付けは、DP<sub>SUBJ</sub>の移動後に起こる。また左方移動の場合と異なり、素性共有によるラベル付けが起きない。そのかわり、vの補部が転送された後、S0<sup>2</sup>にはvのみが残されるため、vが再度投射することでvPとしてラベル付けされ、この特殊なラベル付けの結果、右付加として音声具現を得ると考えた。

一方、OV語順の文法がなくなり、量化表現や否定表現がVよりも前に生じなくなった現代英語では、vがFocus素性を持つことがなくなったと考え、基底V0から右方移動によってのみ疑似空所化を得るための構造形を派生できると論じた。右方移動の方法には、2種類の文法を仮定した。一方は、前述の方略を許す文法であり、この文法を許容する話者は比較構文に限らず疑似空所化を許すと考えた。もう一方は、の方略を許さない文法で、この文法をもつ話者は比較構文の派生方法を使って疑似空所化を得るための構造形を派生していると論じた。その場合、Izvorski (1995) の of 比較構文の分析を援用し、空演算子(x many)のwh移動を仮定した。

$$[_{VP} v [_{VP} V [_{DegP} x \text{ many } [_{PP} \phi \text{ NP}]]]]$$

$$[_{VP} [_{VP} v [_{VP} V [_{DegP} x \text{ many } t^{PP}]]] [_{PP} \phi \text{ NP}]]$$

$$[_{DegP} x \text{ many } t^{PP}] \dots [_{VP} [_{VP} v [_{VP} V t^{NP}] \dots]]$$

比較対象は空演算子(x many)と空の前置詞が主要部のPPを含むDegPであり、まずPPが右付加し、その後DePがwh移動によりCPに付加する。

研究開始当初は、疑似空所化の統語派生について、どのように残余要素を削除範囲から抜き出すかの議論を中心に、英語史における文法変化を捉えることを目標としてきたが、動詞句省略との関連を考えた際に、より重要度の高い議論は、残余要素をどのように抜き出すかよりも、省略構文自体が認可される統語環境についての議論であると考え、特に英語助動詞の特性を英語史研究の観点から明らかにすることを研究の中心とする考えに至った。

NICE特性がみられないことから本動詞Vとみなされてきた古英語の前法助動詞の補部位置でのみ動詞句省略が観察されること、さらにそれ以外の本動詞の補部位置では動詞句省略が観察されないことが、自身の先行研究並びに本研究で行った調査によって確認されている。このことから、次のように主張した。

前法助動詞は、古英語で既に機能範疇Tに生成される助動詞と語彙範疇Vに基底生成される本動詞に分化していた。

この主張により、従来の「全ての前法助動詞が等しくV要素であり、16世紀までにT要素へと文法化した」というシナリオを否定した。さらに、動詞句省略が可能な言語の中には、英語のようにT要素がT位置を占めることを求める言語と、ヘブライ語のようにT要素を何らかの要素が占めれば動詞句省略が認められる言語とに大別されることを主張した。この発想は、Rouveret (2012) のフェイズ理論に基づく形態統語論的な枠組みによる新たな分析により、以下のように修正され、新たな統語分析と重要な観察に発展した。

前法助動詞は、古英語において既に時制形態素としてvに生成されるものと語彙範疇Vに基底生成される本動詞に分化していた。

Rouveret の分析では、言語は時制形態素の導入位置がvかInflかによって大別される。

... Infl ... v+TNS ... Root ... VPE 可

... Infl+TNS ... v ... Root ... VPE 不可

そして、動詞句省略はvに時制形態素が導入される言語でのみ可能で、Inflに時制形態素が導入される言語では動詞句省略ができない。Rouveretはこの方針に沿って、動詞句省略に関する言語データから、時制形態素が英語、ウェールズ語ではvに、ドイツ語ではInflに導入されると分類している。

この助動詞後位省略構文の認可に必要な不可欠な形態統語的特徴をvへの時制形態素導入とする方針に則り、当該構文を英語史の観点で研究を進めることで、Rouveretの分析からさらに進歩した点として、ひとつは英語史における助動詞後位省略構文を適切に説明できることであり、もう一つは(前)法助動詞以外の語彙動詞の補部位置では当該構文が

観察されない事実が説明できるようになったことである。

一連の研究から、英語史を通じて当該構文が(前)法助動詞の補部位置で生じる事実は、(前)法助動詞がvに導入される時制形態素として分析することで説明されてきたが、その他の語彙動詞の補部位置では生じない事実に関しては説明が不足していた。Rouveretによれば、現代英語は時制形態素がvに導入される言語であるが、英語史において同じように助動詞後位省略構文が観察されるならば、古英語などでも時制形態素はvに導入されることになり、動詞繰り上げのある時代においては、語彙動詞を残余とする動詞句省略が観察されないことが説明できない。この問題は、以下のように英語を捉えなおすことで、解決された。

英語はその他のゲルマン語と同様に時制形態素がInf Iに導入される言語だが、vに導入される法助動詞を獲得したという点で特異的な言語である。

これは、動詞句省略と呼ばれる現象は、英語タイプの助動詞後位省略ではなく、ヘブライ語やウェールズ語にみられる語彙動詞を残余とする動詞句省略の方が、言語類型論的には標準的であると述べていることになり、従来の視点とは大きく異なるが、英語史における助動詞後位省略構文の特異性を正しくとらえることができる。

この視点で疑似空所化の研究を進めると、vの補部であるVPが削除されることになる。Gergel (2005)やMerchant (2008)の素性駆動PF削除分析によれば、削除のための素性([E]素性)は、疑似空所化の場合vPを補部に取りFocに位置付けられ、vPが削除されると主張されている。

[<sub>FocP</sub> Remn Foc[E] [<sub>vP</sub> v [<sub>vP</sub> V t]]]

しかし、本研究のように疑似空所化においてもVPが削除されていると考えることで、残余要素である助動詞と目的語の間に副詞が残された事例に説明が与えられる。

[<sub>XP</sub> [<sub>vP</sub> [<sub>vP</sub> v+MOD [<sub>vP</sub> V t] ADV ] Remn]

史的電子コーパスから得られた副詞が削除されずに残っている事例において、副詞がvPに付加しているとする、このような構造からVPを削除する分析が適している。もしのようにvPが削除されれば、

[<sub>FocP</sub> Remn Foc[E] [<sub>vP</sub> [<sub>vP</sub> v [<sub>vP</sub> V t]] ADV]]

のように、副詞もともに削除されてしまうため、事実を説明できない。また、Merchant (2008)が疑似空所化では態の情報が含まれているvが削除対象となっているため、態の不一致が許されないと述べている。

[<sub>FocP</sub> Remn Foc[E] [<sub>vP</sub> v[voice] [<sub>vP</sub> V t]]]

しかし、Tanaka (2011)は、態の不一致が実際には可能で、そのため疑似空所化の削除対象はvPよりも低いVPであると主張している。本研究の調査で収集された後期近代英語の事例からも態の不一致が観察されているため、削除対象はVPであるという本研究の主

張を支持している。

さらに、本研究の方針を推し進めたことで、法助動詞には従来想定されてきたような文法化の歴史は存在しなかったが、完了相の助動詞haveは、従来仮定されてきた、英語史内での文法化があった可能性がみえてきた。haveに関して史的電子コーパスを用いて調査した結果、完了相haveが動詞句省略で用いられ始めたのは中英語からであることが分かった。このことは、古英語で完了の構文を標示するhaveは本動詞Vとして用いられていたが、中英語でvに導入される時制形態素へと文法化したことを示唆している。またイギリス英語に特有に見られる所有を表す本動詞haveが動詞句省略の残余となる事例を考えると、所有haveもV要素からvに導入される時制形態素へと文法化を果たしている可能性が示された。

以上のように、疑似空所化及び動詞句省略に関する共時的・通時的な一連の研究によって英語助動詞の形態統語的性質の重要性が浮き彫りになり、その性質の特定をもって当該構文の解明が進んだといえる。

助動詞後位省略構文の認可に関わる形態統語的特性の研究を進める中で、名詞句内省略構文についても並行的に調査を試みた。形容詞屈折の消失と名詞用法形容詞の消失についての自身の先行研究を基盤とした調査であるが、特に現代英語にも依然として残っている名詞用法形容詞(the rich, the poorなど)の研究にも一定の成果が得られた。

名詞用法形容詞は古英語では現代英語におけるよりも広く観察されてきたが、形容詞屈折の消失に伴い、生起数が減少したことが自身の先行研究によって分かっている。特に属格位置の名詞用法形容詞の生起数は、その他の統語位置と比べて減少の度合いが著しく、中英語にはいるとほぼゼロになる。しかし、現代英語ではthe poor'sのように属格標識を伴う事例がみられることが分かった。まず、急激な減少は、先行研究の分析通り、形容詞が空名詞を前置修飾し、属格接辞が属格標識としてDに生成される接語へと文法化したと仮定、接語が音韻具現の無い空名詞に添加できないという分析によって説明され、近年みられる復活は、空名詞が空の名詞化接辞へと文法化したため、poor自体が名詞化しているという分析によって説明された。この分析は、助動詞後位省略構文の研究の副産物であるが、両者が生成文法理論のどの領域に関わるか、あるいは統合されるのかの議論については、後の課題として残されている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4件)

山村 崇斗 (2016)「英語法助動詞の発達に関する動詞句省略の形態統語的分析からの

一考察」近代英語研究 32号、67～85  
頁、査読あり。

山村 崇斗 (2015)「動詞句省略構文の分布  
と英語助動詞 shall/can の史的発達」2014 年  
度支部大会 Proceedings、188～189頁、  
査読なし。

山村 崇斗 (2014)「英語疑似空所化の史的  
統語変化」JELS 32、195～196頁、査  
読なし。

Yamamura, Shuto (2014) “Reconsidering  
the Development of English Modals: With  
Special Reference to VP-ellipsis,” 論叢  
現代語・現代文化 第13号、17～36頁、  
査読あり。

〔学会発表〕(計 5件)

山村 崇斗 (2016)『シンポジウム:英語の  
変化と生成文法理論』「助動詞後位省略構文  
の通時的観察と理論的考察」、日本英文学会  
北海道支部大会第61回大会、2016年1  
0月29日、北海道教育大学旭川校(北海道  
旭川市)。

山村 崇斗 (2015)「英語史における形容詞  
の名詞的用法の発達」、言語変化・変異研究  
ユニット第2回ワークショップ『コーパスか  
らわかる言語の可変性と普遍性』、2015  
年9月8日～9日、東北大学(宮城県仙台市)。

Yamamura, Shuto (2015) “An Emergence of  
a Novel Structure of ‘The + Adjective’  
Constructions in English,” 22nd  
International Conference on Historical  
Linguistics, 2015/7/27-31, Naple (Italy)。

山村 崇斗 (2014)『シンポジウム:英語の  
史的变化と言語タイプ』「動詞句省略構文の  
分布と英語助動詞 shall/can の史的発達」、  
日本英文学会中部支部第66回大会、201  
4年10月18日、中京大学(愛知県名古屋市  
市)。

山村 崇斗 (2014)『SYMPOSIA:省略現象か  
ら考える統語論と意味論のインターフェイ  
ス』「英語史における助動詞後位省略現象に  
ついて」、日本英文学会第86回大会、20  
14年5月24日～25日、北海道大学(北  
海道札幌市)。

〔図書〕(計 2件)

山村 崇斗 (2016)「疑似空所化かから見る  
英語法助動詞の史的発達」『文法変化と言語  
理論』、262 - 277頁、開拓社。

山村 崇斗 (2016)「英語における名詞用法  
形容詞の発達史」『コーパスからわかる言語  
変化・変異と言語理論』、181 - 196頁、  
開拓社。

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

山村 崇斗 (YAMAMURA, Shuto)

筑波大学・人文社会系・助教

研究者番号: 30706940